第５章　京都大学本部構内ＡＴ25区の立合調査

伊藤淳史

１　調査の概要

調査地点は，京都大学本部構内の南半，正門付近一帯にあたる（図版１－377，図95）。ここに，百周年時計台記念館周辺環境整備工事が計画され，バスロータリーの新設をはじめとして，各種埋管や街灯，ベンチなどの移設や新設といった，掘削をともなう大小多数の工事が広域にわたり実施されることになった。そのため，随時掘削機会に立ち会い，重要遺構･遺物の不時発見に備えるとともに，各地点の包含層や遺構の遺存状況を確認記録し，遺物の採取に努めることで，遺跡の時期やひろがりの基礎情報を確保することとした。調査期間は2010年12月14日～2011年４月４日。採取遺物は整理箱１箱。

対象地一帯は，京都大学本部構内への正面入口として，道路や植栽が多くを占める空間であり，これまで大規模な発掘調査は実施されてこなかった。周辺では，東南方の75・89地点で，奈良時代の竪穴住居，中世の木棺墓，幕末期尾張藩邸堀の東南コーナーなどが報告されている。また北方にある時計台記念館改修にともなう296地点の調査では，玄関前のトレンチにおいて，尾張藩邸に関連するとみられる集石遺構と幕末期の瓦と陶磁器がまとまって出土しているほか，北側の調査区で中世段階の白川道の路面が検出されている。

このように，おもに古代以降の各時期にわたる遺跡のひろがりが予想されるなかで，工事が進められた。結果，幕末期尾張藩邸堀の南辺については，明確に断面が検出され，規模や埋積状況を把握することができた。これについては，すでに188地点や293地点の立合調査でも過去に確認されていたところでもあり，ほぼ予想通りの成果であったといえる。ほかには，包含層の遺存とピットや溝と思われる落ち込みを随所の壁面で確認したものの，遺構については，面的な把握は困難で，それぞれ性格を特定できるまでには至らなかった。包含層については，当初より想定していた古代以降の堆積に加えて，先史時代の可能性が高い黒色土層を一部の地点で確認でき，一帯の地形環境の変遷を復元するうえで重要な知見を得たものといえる。

2　調査の成果

工事はⅠ期～Ⅲ期に時期と空間を分割して進められ，ここでもその区分に従って報告する。各調査地点には１～45の地点番号を与え，東半のⅠ・Ⅱ期工区分は図96，西半のⅢ期工区分は図97に位置を示した。また，各地点の成果概要を表２に一覧としてまとめた。以下，特筆すべき成果の得られた地点を中心に，詳述する。

⑴ Ⅰ期工区の調査成果（図版24，図96・97）

工事対象地の東南部，おもにバスターミナル新設に関連する工区で，工事前は駐輪場や道路であった。南側の東一条通り路面とは現状で60㎜程度高くなっている。表土は20㎝程度しか無く，アスファルト舗装と砕石層を取り除くと近世包含層が露出する地点も多い。西北方へ向かうほど表土は浅く，今回工事により広い範囲で近世層が削平されてしまっている。

東南方の地点５一帯では各時期の包含層が良好に遺存しおり，灰褐色土，茶褐色土，黒色土がそれぞれ20㎝前後の層厚をもって確認される。最下層の黒色土は，遺物の包含に乏しいが，奈良時代以前の古代の可能性が高いだろう。その北側一帯を東西に掘削した地点13においても，表土層が若干厚くなるのみでほぼ同様な状況であった。

中間に位置する地点８では，灰褐色土と黒色土のみで，中世の包含層である茶褐色土が認められなかった。南北方向に長く掘削したこの地点では，東西方向にはしる幅4.6m深

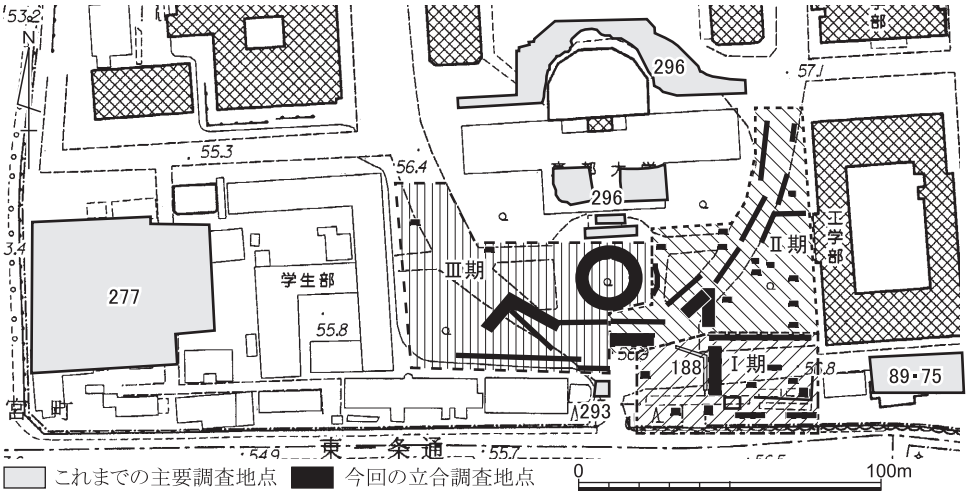

図95　本部構内南半の主要調査地点と立合調査位置　縮尺1/2500

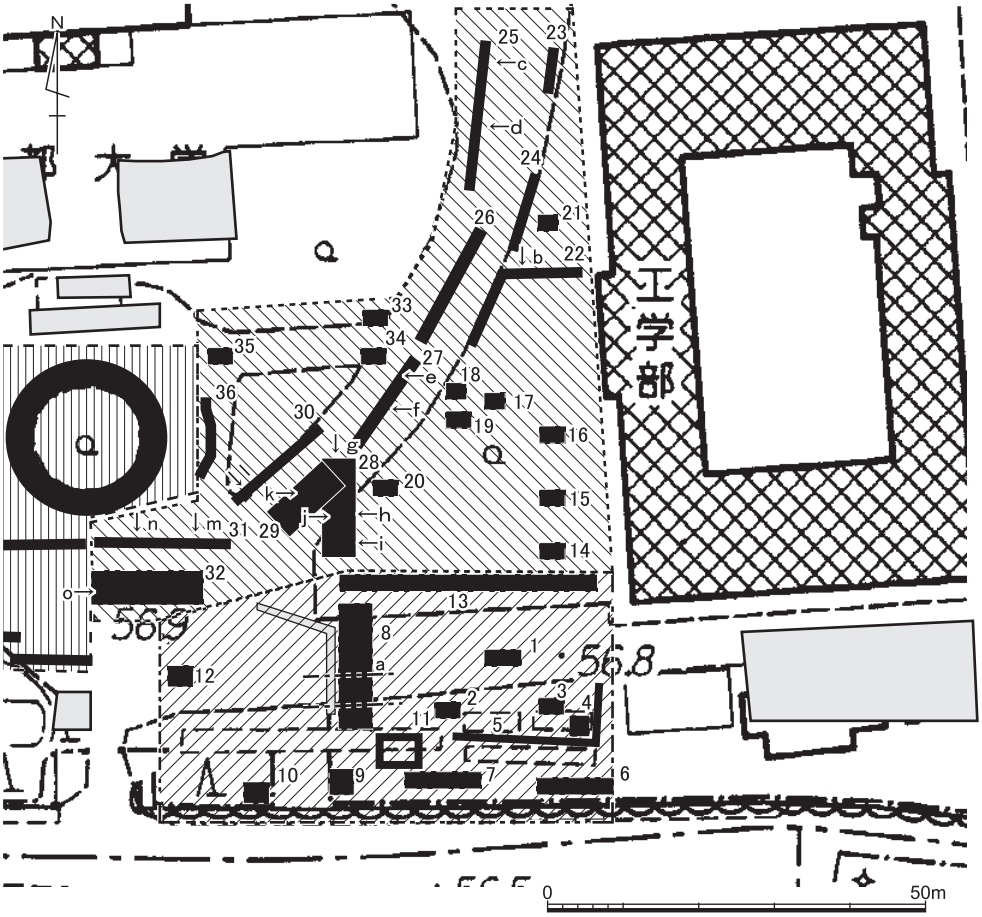

図96　今回の立合調査地点（Ⅰ・Ⅱ期工区）　縮尺1/1000

さ1.8mの逆台形の溝が検出された（図96－ａ地点）。すでに周辺でも確認されてきているように，幕末期尾張藩邸の南堀とみて間違いない。埋土についてみると（図98），南肩に黒灰色砂質土が堆積しているほかは，基盤層である黄白色の粗砂と黒色粘質土のブロックとが互層に縞状を呈している状態を基本としている。滞水や流水があった兆候は認められず，短期のうちに掘削された土によって埋積しているように見受けられる。埋土中には陶磁器片が含まれているが，多くはない。この付近に茶褐色土が認められないのは，微高地状の旧地形であることに加えて，近世段階に削平されてしまったのだろう。黒色粘質土中からは奈良時代の製塩土器片とみられる土師器片が出土したほか，出土層順は不明だが，同時期の須恵器蓋が採集されている（図99－Ⅳ１）。

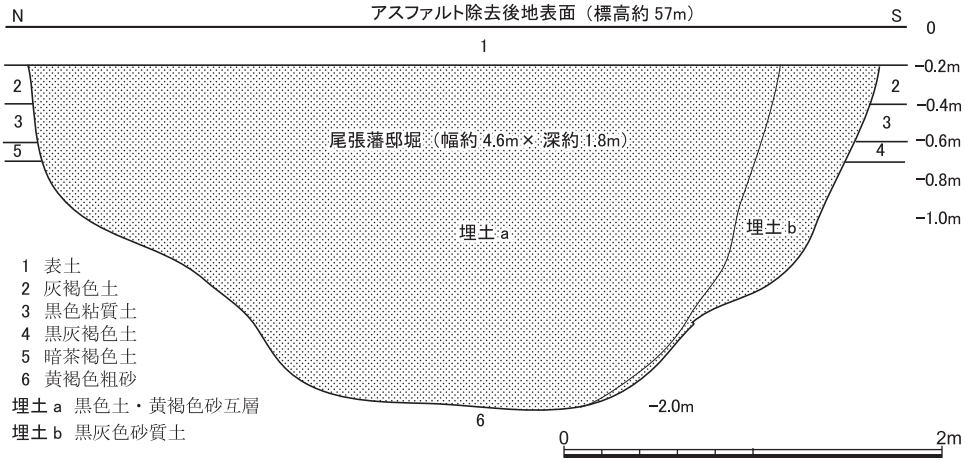

図97　地点８－ａ地点検出尾張藩邸堀断面略測図　縮尺1/40

(2) Ⅱ期工区の調査成果（図版25～27，図96）

工事対象域の北東一帯に多数の掘削がおこなわれた。とくに正門から北東へ向かう道路敷部分は管路の掘削が集中し，かなりの範囲が破壊されてしまったと言える。

地点22では，Ⅰ期工区と同様に灰褐色土，茶褐色土，黒色土の安定した堆積が確認され，うちｂ地点では黒色土に土坑状の落ち込みが認められた。これら３層の堆積は，北方の地点25付近一帯まで確認されるが，層厚は薄くなる。ｃ地点付近では，20～30㎝程度の砂層を介してその下に暗茶褐色の土壌化層の堆積が認められる。先史時代層の可能性があるが，遺物の包含は確認できず，また広がりも定かではない。その南方の地点27～29一帯は，深いところで現地表下3.0m付近まで掘削しているが，黒色土以下はすべて砂層で，こうした土壌化層は確認できていない。地点27のｅ地点では茶褐色土の，ｆ地点では黒色粘質土のピットや落ち込みが認められたが，遺構の密度が濃くなるのは地点28や29付近一帯で，ｉ地点で住居の可能性がある黒色粘質土の落ち込みを，ｈ・ｋ地点で東西大溝となる可能性をもつ茶褐色土の落ち込みや硬化面など，複数の遺構が集中している（図版26－１・２）。ｇ・ｊ地点付近では，近世の漆喰製野壺も計４基確認されることから，近世段階においても，土地境界など有意な空間であり続けていた可能性が高い。地点30の１地点では灰褐色土が大きく落ち込んであり，近世井戸の可能性も考えられる。地点31では灰褐色土が東から西へと小規模な段差をもって下っており，地点32では北から南への同様な状況が確認された。近世段階では，北東から南西方向へと下る棚田状の耕作地が連なる景観であった様子が想起される。

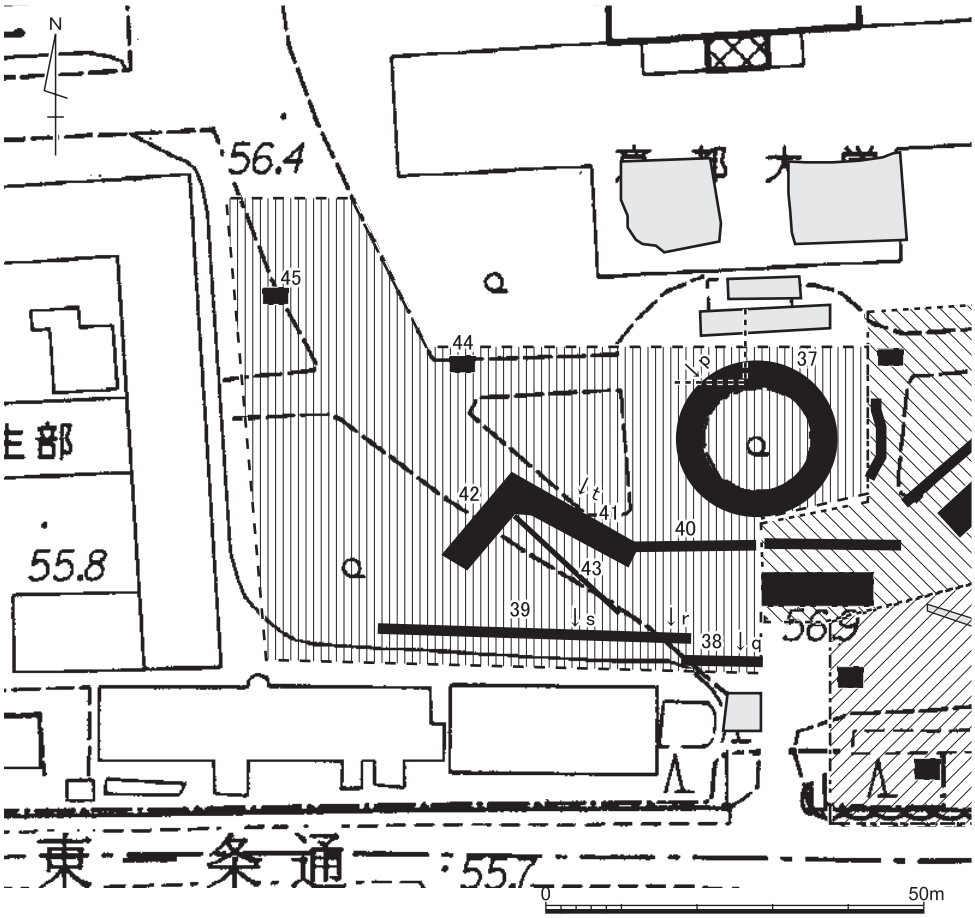

図98　今回の立合調査地点（Ⅲ期工区）　縮尺1/1000

地点33～36は，上記の北側一帯を浅く掘削した工事である。灰褐色土や茶褐色土は安定して堆積が確認されるが，層厚はやや薄く，比較的浅いレベルで確認できる。地点36では現地表下0.4mまで掘削したところで黒色粘質土の上面が露出した。この地点では近世の陶器蓋を採集している（図99－Ⅳ２）

⑶ Ⅲ期工区の調査成果（図版28・29）

西側の工区で，時計台前のクスノキの養生にともなう掘削と，道路部分を中心とする管路掘削がある。件数は少なく，西北域一帯については桝の設置にともなう方形掘削のほかは表土層付近の浅い工事であった。

地点37は，時計台前クスノキの周囲をめぐる形で３ｍ幅程度を掘削した。クスノキ下に

は灰褐色土・茶褐色土・黒色粘質土の各層が20～30㎝程度の厚さで安定して堆積しており，西方へ向かってわずかに下るような状況を確認できたが，今回の工事により，黒色粘質土より上部はほぼ削平されてしまったといえる。西北角のｐ地点で垂直に近い灰褐色土の鋭い落ち込みを２カ所検出した。2002年度の時計台記念館改修にともなう調査（296地点）の玄関前トレンチにおいて，幕末期の落ち込みをともなう集石遺構を確認しており〔伊藤・梶原2007　p.156〕，方形と推定されるこの遺構の南辺が及んだものと思われる。

地点38・39は，本部構内南辺付近を東西に長く掘削した形となった。正門に近いｑ地点では，茶褐色土中から黒色粘質土の上面にかけて，南北方向にはしる幅１ｍ足らずの集石遺構と溝が並列して検出された。中世段階の何らかの区画施設であろう。ｒ地点においては井戸の可能性がある茶褐色土深い落ち込みが存在しており，ｓ地点においても南北溝の可能性がある落ち込みを検出している。

地点40～42は，道路敷き部分でのⅡ期工区からの管路の延長工事である。地点41・42は幅広く地表下1.7m付近まで掘削し，ｔ地点付近のみに窪地状に黄色の細砂層とその下の黒色粘質土２が堆積し，ゆるやかに立ち上がって消失している状況を確認した。この黒色粘質土２からは，磨消縄文を確認できる微細土器片を採集している。限られた範囲であるので断定は困難だが，本部構内西半から北部構内にかけて鍵層として確認される弥生前期末の土石流堆積層が，局所的に窪地状の地形に遺存していたものと考える。

地点44・45では深い掘削をおこなっていないが，80㎝程掘り下げてようやく近世の灰褐色土に到達する状況であった。この一帯は本来的には微高地を外れた低地で，近代以降の盛土によって現在の平坦地が確保されていることが確認できた。

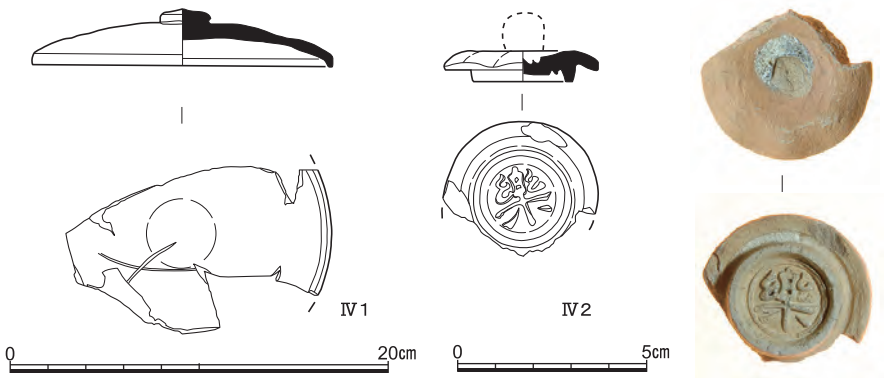

図99　本部構内立合調査出土遺物
（Ⅳ１：Ⅰ期工区地点８出土須恵器蓋　縮尺1/4，Ⅳ２：Ⅱ期工区地点36出土陶器蓋　縮尺1/2）

⑷ 出土遺物（図99）

調査全体で整理箱１箱の遺物を採取している。多くが灰褐色土出土の近世陶磁器類で，とくにⅡ期工区で出土量が多い。Ⅰ期工区の地点８では，黒色土中より奈良時代の製塩土器片が出土しているほか，層位不明ながら同時期ころの須恵器蓋を採集している（Ⅳ１）。一帯で確認される黒色土や黒色粘質土が，古代の遺物包含層であることを示唆する状況と言えよう。地点20は，近接して廃棄土坑が存在するとみられ，染付の大破片などがまとまって出土している。地点36では，蓋かとみられる陶器が出土し，内側に○囲み「樂」銘の押印を認める（Ⅳ２）。黄白色の胎土で焼成は堅緻，外面に淡燈色の泥漿状のものが塗られており，つまみが剥落したかのような痕跡がある。印は，樂家十代の吉左衛門旦入（1795

表２　時計台周辺立合調査一覧

地区	地点	調査日	概　　要
Ⅰ期	1	20101214	GL.-0.75mまで掘削。-0.25～-0.6m明灰褐色土および黒灰褐色土(ともに近世)，以下茶褐色土(中世)
Ⅰ期	2	20101222	GL.-1.0mまで掘削。-0.2～-0.3m灰褐色土(近世)，～-0.5m暗灰褐色土(中世)，～-0.6m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色砂質土(地山)
Ⅰ期	3	20101222	GL.-1.0mまで掘削。-0.3～-0.4m灰褐色土(近世)，～-0.8m暗灰褐色土(中世)，以下黒色粘質土落ち込み(古代か)，黄褐色砂質土(地山)
Ⅰ期	4	20101217	GL-0.9mまで掘削。-0.3～-0.4m灰褐色土(近世)，～-07m暗灰褐色土(中世)，以下白色粗砂(地山)
Ⅰ期	5	20101227	GL-0.7mまで掘削。西辺部-0.1～-0.25m灰褐色土(近世)，～-0.3m茶褐色土(中世)，～-0.6m黒色土(古代か)，以下黄褐色砂質土(地山)。**図版24－1・2。**
Ⅰ期	6	20101220	本部構内南縁石垣盛土1.0m。下部GL.-0.3mまで灰褐色土(近世)，～-0.5m暗灰褐色土(中世)，～-0.8m茶褐色土(中世)が遺存。
Ⅰ期	7	20101227	本部構内南縁石垣の北側表土除去。石垣盛土北裾にも2段の石組確認。
Ⅰ期	8	20101217	GL-0.2m以下で幅4.6m深さ1.8mの尾張藩邸堀確認(a地点)。**本文・図97・図版24－3・4参照**
Ⅰ期	9	20101217	GL-1.2mまで掘削。-0.6mが東一条通路面レベル。-0.4～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.8m黒色粘質土(古代か)，～1.0m暗茶褐色土(時期不明)，以下黄褐色土。
Ⅰ期	10	20101224	本部構内南縁石垣盛土除去。石垣内側に控え積みの存在を確認。盛土下に灰褐色土(近世)遺存確認。
Ⅰ期	11	20110118	GL-0.6mまで掘削。-0.1～-0.4m灰褐色土(近世)，以下黒色粘質土(古代か)
Ⅰ期	12	20110221	GL-0.9mまで掘削。-0.2～-0.4m灰褐色土(近世)，～-0.5m茶褐色土(中世)，～0.7m黒褐色砂(古代か)，以下黄褐色砂(地山)
Ⅰ期	13	20101221	GL-1.0mまで掘削。中央部-0.3～-0.5m灰褐色土(近世)，～-0.7m淡灰褐色土(中世か)，～-0.9m黒色粘質土(古代か)，以下褐色土粘質土(地山)。東部は表土厚くなり地表面レベル上がる。**図版24－5・6。**
Ⅱ期	14	20110201	GL.-1.0mまで掘削。-0.6～-0.9m茶褐色土(中世)，以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	15	20110126	GL.-1.6mまで掘削。-0.7～-1.0m茶褐色土(中世)，～-1.3m暗茶褐色土(中世)，以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	16	20110126	GL.-1.6mまで掘削。-0.4～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.9m茶褐色土(中世)，～-1.0m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	17	20110204	GL-0.9mまで掘削。-0.2～-0.4m灰褐色土(近世)，～-0.6m茶褐色土(中世)，～-0.9m黒色粘質土落ち込み有り(古代か)、以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	18	20110210	GL-0.8mまで掘削。-0.1～-0.2m灰褐色土(近世)，～-0.4m茶褐色土(中世)，～-0.6m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	19	20110126	GL.-1.6mまで掘削。-0.3～-0.4m灰褐色土(近世)，～-0.6m茶褐色土(中世)，～-0.8m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)
Ⅱ期	20	20110126	GL.-1.6mまで掘削。～-0.2m灰褐色土(近世)，～-0.4m茶褐色土(中世)，～-0.7m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)，近世廃棄土坑の一部かかる。

表２　つづき

地区	地点	調査日	概　　要
Ⅱ期	21	20110214	GL.-1.2mまで掘削。-0.2～-0.4m灰褐色土(近世)，～-0.8m茶褐色土(中世)，～-1.0m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)。西側道路面は-0.4mまで削平。
Ⅱ期	22	20110214	GL.-1.0mまで掘削。-0.1～-0.2m灰褐色土(近世)，～-0.4m茶褐色土(中世)，～-0.6m黒色粘質土(古代か)，以下黄褐色土(地山)。南側面は-0.2mまで削平。茶褐色土上面が露出。幅1.5m深さ1.0mの黒色粘土層落ち込み確認(b地点)。**本文・図版25－１・２参照。**
Ⅱ期	23	20110207	GL-0.8mまで掘削。-0.3m～-0.4m黄白色シルト(時期不明)，～-0.6m黄白色シルト，以下白色粗砂(地山)
Ⅱ期	24	20110207	GL-0.7mまで掘削。-0.1m～-0.3m暗茶褐色土(中世)，～-0.6m黒色粘質土(古代以前か)，以下黄灰色シルト(地山)
Ⅱ期	25	20110202	GL.-1.0mまで掘削。c地点-0.2～-0.3m灰褐色土(近世)，～-0.4m暗茶褐色土(中世)，～-0.7m黄色粗砂(時期不明)，-0.9m暗茶褐色シルト，以下黄白色粗砂(地山)。d地点は-0.5～-0.7m黒色粘質土(古代以前か)。以下黄褐色砂質土(地山)。**図版25－３・４参照。**
Ⅱ期	26	20110202	GL.-2.9mまで掘削。-0.3～-0.4m暗茶褐色土(中世)，～-0.5m黒色粘質土(古代以前)以下黄褐色砂質土(地山)
Ⅱ期	27	20110201	GL.-2.9mまで掘削。-0.2～-0.4m黒色粘質土(古代以前)以下黄褐色砂質土(地山)。e地点茶褐色土ピット，f地点黒色粘質土落ち込み。**図版25－５参照。**
Ⅱ期	28	20110201	GL.-1.5mまで掘削。-0.4m～-0.7m茶褐色土(中世)，～-0.8m黒色粘質土，以下黄褐色砂質土(地山)。近世野壺4基、h-j附近に東西溝状落ち込み，i附近に黒色粘質土ピット2基。**図版26－１・２参照**
Ⅱ期	29	20110208	GL.-1.3mまで掘削。-0.1～-0.3m灰褐色土(近世)～-0.4m暗灰褐色土(近世)～-0.6m茶褐色土(中世)，～-0.8m黒色粘質土(古代以前)，以下黄褐色土(地山)。k附近に茶褐色土東西溝状落ち込み，附近の黒色粘質土上面に硬化面。**図版26－３・４参照**
Ⅱ期	30	20110210	GL.-0.8mまで掘削。-0.1～-0.4m灰褐色土(近世)～-0.6m茶褐色土(中世)，～-0.8m黒色粘質土。南辺で灰褐色土南へ下る段差地形と井戸状落ち込み検出(地点i)。**本文・図版26－５・６参照。**
Ⅱ期	31	20110215	GL.-1.4mまで掘削。-0.3～-05m灰褐色土(近世)～-06m茶褐色土(中世)，～-1.0m黒色粘質土以下黄褐色砂質土(地山)。灰褐色土は西へ向かい小規模な段差で下る。西辺に漆喰野壺。茶褐色土根石ピット(m地点)。黒色粘質土落ち込み(n地点)。**図版27－１・２参照。**
Ⅱ期	32	20110203	GL.-1.8mまで掘削。-0.3～-0.5m灰褐色土(近世)～-0.6m茶褐色土(中世)，～-0.9m黒色粘質土(古代以前)，以下黄褐色土及び白色粗砂(地山)。灰褐色土北から南への段差(o地点)。茶褐色土も南へ傾斜。**図版27－３・４参照。**
Ⅱ期	33	20110201	GL.-0.8mまで掘削。-0.5～-0.7m灰褐色土(近世)～以下黄白色砂(地山)。灰褐色土は東へ傾斜。**図版27－５参照。**
Ⅱ期	34	20110201	GL.-0.8mまで掘削。-0.2～-0.5m茶褐色土(中世)以下黄白色砂(地山)。
Ⅱ期	35	20110201	GL.-0.6mまで掘削。-0.2～-0.3m茶褐色土(中世)，～-0.5m黒色粘質土(古代以前)，以下黄白色砂(地山)。
Ⅱ期	36	20110215	GL.-0.4mまで掘削。茶褐色土削平。黒色粘質土上面が露出。**包含層中より「樂」の押印ある陶器採集(図99－Ⅳ2)。図版27－６参照。**
Ⅲ期	37	20110309	クスノキ周りを3m幅で最大GL.-1.3mまで掘削。-0.6～-0.9m灰褐色土(近世)，～-1.1m茶褐色土(中世)～-1.3m黒色粘質土(古代)，各層とも西側ほどレベル下がる。灰褐色土の鋭い落ち込み確認(p地点)。**本文・図版28－１・２参照。**
Ⅲ期	38	20110328	GL-1.1mまで掘削。-0.5～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.7m黒色粘質土(古代以前)，～-0.8m灰色粘質土以下黄褐色砂質土(地山)。南北方向集石と溝状遺構検出(q地点)。**図版28－３・４参照。**
Ⅲ期	39	20110308	GL-0.9mまで掘削。-0.3～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.7m茶褐色土(中世)，～-0.8m黒色粘質土(古代以前)，以下黄褐色土(地山)。茶褐色土深い落ち込み(r地点・井戸か)。茶褐色土南北溝状落ちの込み(s地点)。**図版28－５・６、29－１・２参照。**
Ⅲ期	40	20110314	GL-1.0mまで掘削。-0.1～-03m灰褐色土(近世)，～-0.5m茶褐色土(中世)，～-0.7m黒色砂質土(古代以前か)，以下黄色シルト(地山)。
Ⅲ期	41	20110317	GL.-1.7mまで掘削。窪地状に黄色細砂堆積と下層黒色土確認(t地点付近)。-0.3～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.9m茶褐色土(中世)，～-1.2m黒色粘質土1(古代か)，～-1.6m黄色細砂，以下黒色粘質土2(先史時代か)。**本文・図版29－３・４参照。**
Ⅲ期	42	20110331	GL.-1.7mまで掘削。-0.4～-0.5m灰褐色土(近世)，～-0.8m茶褐色土(中世)，～-1.0m暗茶褐色土(古代以前か)，以下黄褐色砂質土(地山)。西壁に茶褐色土の小ピット確認。
Ⅲ期	43	20110331	GL.-1.5mまで掘削。-0.2～-0.6m灰褐色土(近世)，～-0.9m茶褐色土(中世)，～-1.1m黒褐色砂質土(古代以前か)，以下黄褐色砂質土(地山)。灰褐色土は2層に分層可。
Ⅲ期	44	20110328	GL.-1.0mまで掘削。-0.8m以下に灰褐色土(近世)。図版29－５・６参照。
Ⅲ期	45	20110404	GL.-1.0mまで掘削。-0.7～-0.9m灰褐色土(近世)，以下茶褐色土(中世)。

～1854）が，紀州藩十代藩主徳川治宝（とくがわはるとみ）から文政９年（1826）に賜った「拝領印」である[1]。

3　小　　結

今回の立合調査においては，面的に把握される遺構の発見には至らなかったものの，古代～近世に至る各時期の遺物包含層が，ほぼ全域で堆積している状況をあらためて確認できた。また，古代・中世については，断面観察から想定される遺構の出現頻度でみると，本部構内正門の北東側一帯，Ⅱ期工区の地点28付近でとくに密度が高まっている状況が把握された。今後注意すべき空間と言えよう。近世については，幕末期尾張藩邸の南限を画する堀について，あらためて断面の規模や埋積状況を確認できた。しかしながら，今回も堀の途切れ部を把握することは出来なかったため，絵図上では堀が途切れて描かれている藩邸入り口がどこに比定されるのか，解決は今後に持ち越された。また，遺物として，○囲み「樂」の押印資料が出土したことは，藩邸期前後の人的交流や流通を考えていくうえで，貴重な情報が追加されたと言えよう。

先史時代については，弥生前期末の土石流堆積層である黄色砂やその下層の黒色粘質土層が，限られた範囲で窪地状に存在している状況が確認できた。黄色砂は，本部構内では基本的に西半域を中心に堆積しており，中央から東域にかけては微高地にあたるため，局地的に堆積するにとどまることは，これまでも把握されてきた〔伊藤・梶原2007　p.128〕。今回，地点41においては，窪地状の低地に堆積する両層のたちあがり箇所が把握されたほか，地点25・26付近においてもその可能性のある堆積層を確認した。調査機会が無く状況不明であった本部構内中央南半一帯は，基本的には北東－南西を基調とする尾根状地形でありながら，弥生前期の段階で微低地や浅谷状地形が随所に存在していたことが，あらためて確認できたといえる。同時に，北白川扇状地を広くおそった弥生前期末の土石流について，現在は堆積が確認されない微高地上も，いったんはそれに覆われた可能性を，こうした局所的な残存が示唆している。先史時代から古代にかけての地形形成や開発の過程を復元していくうえで，興味深い状況といえるだろう。

〔注〕

（1）　当該資料と印については，樂家十五代当主樂吉左衛門氏（公益財団法人樂美術館館長）に御鑑定いただいた。厚く御礼申し上げます。